

日蓮大聖人御書全集

いっさくじつごしょ

一昨日御書

新版
873
S
874

いつきぐじつごじょ

一昨日御書

文永八年(71)

9月12日 50歳

平左衛門尉頼綱

一昨日、見参に罷り入り候の条、悦び入り候。

そもそも人の世に在るに、誰か後世を思わざらん。仏の

世に出ずるは専ら衆生を救わんがためなり。ここに日蓮、

比丘と成りしより、かたがた法門を開き、すでに諸仏の本意
を覺り、早く出離の大要を得たり。その要は妙法蓮華経これなり。一乗の崇重、三国の繁昌の儀、眼前に流る。誰

か疑網を貽さんや。しかるに、専ら正路に背いて、ひとえ

じゃず ぎょう

しようと くに す

せんじん いか

いか

に邪途を行はず。しかるあいだ、聖人は國を捨て、善神は眞りを成し、七難並び起こつて四海閑かならず。

方今、世はことごとく関東に帰し、人は皆土風を貴ぶ。

なかんずく日蓮、生をこの土に得て、あに吾が國を思わざらんや。よつて立正安國論を造つて、故最明寺入道殿の

御時、宿屋入道をもつて見参に入れ畢わんぬ。

しかるに、近年の間、多日のほど、犬戎は浪を乱し、夷敵は国を伺う。先年勘え申すところ、近日符合せしむるものなり。彼の太公が殷の国に入りしは、西伯の礼による。

ちょうどりょう しんちょう はか

かんおう まこと かん

まこと

かん

張良が秦朝を量りしは、漢王の誠を感じればなり。これ皆、時に当たつて賞を得たり。

謀を帷帳の中に回らし、勝つことを千里の外に決せしものなり。

ものなり。

夫れ、未萌を知る者は、六正の聖臣なり。法華を弘むる者は、諸仏の使者なり。しかるに、日蓮、忝くも鷲嶺・鶴林

の文を開いて鵝王・烏瑟の志を覺り、あまつさえ、将来

を勘えたるに、ほぼ符合することを得たり。先哲に及ばず

といえども、定めて後人には希なるべき者なり。法を知り國

おも

こころざし

しょう

じやほう

を思うの志もつとも賞せらるべきのところ、邪法・
邪教の輩やから、讒奏・讒言ざんそうするのあいだ、久しく大忠だいちゅうを懷い
て、しかもいまだ微望ひぼうを達せず。あまつきえ、不快の見参ふかいに
罷り入ること、ひとえに難治なんじの次第しだいを愁うるものなり。

伏して惟んみれば、泰山たいざんに昇らずんば天てんの高きたかを知らず、
深谷しんごくに入らずんば地ちの厚きあつを知らず。よつて御存知ごぞんちのため
に立正安國論りっしょあんこくろん一卷いつかんこれを進覽しんらんす。勘かんがえ載のするところの文
は九牛きゅうぎゅうの一毛いちもうなり。いまだ微志びしを尽くさざるのみ。

そもそも貴辺きへんは當時天下の棟梁とうじてんかなり。何ぞ國中の良材なんりょうざい

そん

はや けんりよ めぐ

いてき しりぞ

しおぞ

を損ぜんや。早く賢慮を回らして、すべからく異敵を退く
べし。世を安んじ國を安んずるを、忠となし孝となす。こ
れひとえに、身のためにこれを述べず、君のため、仏のた
め、神のため、一切衆生のために言上せしむるところな
り。恐々謹言。

かみ

いつさいしゅじょう

ごんじょう

ほとけ

きみ

の

み

よ

やす

くに

やす

ちゅう

こう

ちゅう

さう

かみ

み

かみ

にちれん かおう

日蓮

花押

ぶんえいはちねんくがつじゅうににち
文永八年九月十一日

きんじょう

へいのさえもんのじょうどの

謹上 平左衛門尉殿